

# これからの中学校運動部活動の運営のあり方に関する一考察

## A study on the Ideal existence of sport club in junior high school

1K07B216-1

山崎淳平

指導教員 主査 吉永武史 先生

副査 杉山千鶴 先生

### 1. 本研究の動機

筆者は、2008（平成20）年から現在まで東京都内の公立中学校にて、外部指導者として陸上部の指導を行っている。指導する立場で運動部活動に関わってみて感じたことは、現在の中学校運動部活動運営が十分ではないということであった。

運動部活動は生徒の自主的な活動であるが、すべてを生徒に一任するやり方では確かな成長まではたどりつかないだろう。やはり指導者となる教員の力が不可欠である。しかしながら、学校現場では多くの教員が授業や生徒指導などの校務に時間を割かなければならず、どうしても部活動の優先順位は下位になってしまうのが現状である。

中学校の教員は校務等で多忙の中、放課後に行われる部活動をほぼボランティア同然で指導しなければならない。そのような現状において、新学習指導要領の示すように教育課程との関連をもって指導することは果たしてできるのであろうか。また、生徒が運動部の活動に積極的に参加できるように配慮しながら適切な指導を行えるのかと考えたときに、疑問が残る。現在の中学校運動部活動は運営面で多くの課題を抱えていると言える。

そこで本研究では、現在の中学校運動部活動の運営における課題を明らかにし、その課題解決に向けてのこれからの中学校運動部活動の運営のあり方について明らかにしたいと考えた。

### 2. 本研究の目的

現在行われている中学校運動部活動の課題を明確にし、それを解決すべく今後の中学校運動部活動の運営について、現状の形態を維持すべきか、他方で地域のクラブに移譲すべきか、アメリカのような運動部活動の運営にするべきかについて検討していくことが目的である。

### 3. 研究方法

本研究は、学校体育や中学校運動部活動に関する

記事や報告書などの文献資料から、現在の中学校現場で起きている問題を読み取ることができると考え、それらを対象とする文献研究によるものとする。また、情報が不足する場合は、運動部活動に関するインターネット上のホームページを参考にし、考察を加える方法によって行う。

### 4. 考察

第1章では、戦後の中学校運動部活動を概観した。中学校運動部活動は一貫して教育課程外に置かれてきたこと、制度的な位置づけを失いながらも存在し続けてきたことを明らかにした。

第2章では、中学校運動部活動の直面する現状と課題について明らかにした。少子化やそれに伴った指導者の減少により、学校単独での運動部活動の限界を招くことが示唆された。

第3章では、第2章で明らかとなった課題を元に、今後の中学校運動部活動の運営について、「イン・スクール型」、「アウト・オブ・スクール型」、「アメリカ型」の3つの運営形態の提言をした。

結章では、本研究の要約と今後の課題について記した。中学校運動部活動の課題を解決するために一番理想的な運営形態は「アウト・オブ・スクール型」であるが、その受け皿となる総合型地域スポーツクラブの数が現状では不十分であることから、今後しばらくは、「イン・スクール型」として運営し、総合型地域スポーツクラブが十分に普及した後、徐々に「アウト・オブ・スクール型」へ移行する形が現在有力であるとした。

今後の課題として、本研究では、研究対象を中学校運動部活動に限り行ったので、高等学校における運動部活動の研究や、個々の運動部活動種目についての詳細の研究が今後の課題として挙げられる。

また、「アウト・オブ・スクール型」の運営にあたって、総合型地域スポーツクラブにおける運営収支などの経済面を含めた運営モデルの検討を研究課題とし、今後のさらなる研究に期待したい。